我が子は善知識

ある若いお母さんが、生後一ヶ月余りで我が子を亡くされました。
生まれながら心臓に異常があることが分かり、病院の勧めもあり思い切って手術を試みたのですが、その甲斐もなく短い生涯を閉じたのです。
手術が行われるその日まで、我が子を抱き母乳を与え、母親として精一杯の愛情を注ぎました。

形ばかりの葬儀が行われ、四十九日の法要も済ませたのですが、我が子の死をあきらめきれないその若いお母さんは、遺骨をどうしても手放そうとしません。
そんな彼女の身を案じる友人が、お骨をそのままにしておいてもいいものかどうか、尋ねられました。

たとえ、今生で一ヶ月余りの親子のご縁であったとしても、母親にとって我が子を亡くすことほど悲しいことはありません。この母親と同じ時期に出産したその友人にとって、彼女の心情は痛いほど分かるのです。

遺骨をそばに置き、遺骨と共に寝起きをし、我が子のことをいつまでも偲んでいきたい。
そんな彼女の切ない思いに友人は涙するのです。
まことに胸のつまる思いがします。

世間ではよく「いつまでも、お骨を家に置いておくものではない」と言われます。
しかし、これは仏教的には全く根拠のないことです。
何時までに納めなければいけないという決まりなどはありません。

この場合ですと、母親の悲しみが和らぐまで遺骨をそばに置いておくことになんら問題はないのです。また、ある程度時間が経たないと、お骨を手放すことが出来ないでしょう。

ただ残念なことに、私たち人間は「形あるもの」にどうしてもとらわれてしまいます。そうして、そのことによって、その形の奥にある「大切なもの」が見えなくなることがあるのです。

遺骨をそばに置くことに問題はありませんが、遺骨に執着する余り、いたずらに悲しみを深め、その「大切なもの」を見失う恐れがあるのです。
ここで大事なことは、その悲しみを単なる悲しみとして終わらせてはいけないということです。
悲しみの涙はいずれ乾く時がきます。その時、「私の人生にとってあの悲しみこそがまことに大きな恵みでありました」と心から頂けるような「大切なもの」をそこから学んで欲しいのです。

涙した者でなければ分からない、涙そのものが教えとなって届けてくれる「大切なもの」に気づいてもらいたいのです。

平安時代、和泉式部という女流歌人が、ひとり娘を亡くし、深い絶望と悲しみの中、仏法（仏さまの教え）に出遭い、次のような歌を残されています。

夢の世に
あだにはかなき身を知れと
教えて帰る子は知識なり

知識とは善知識と言い、仏さまのみ教えに導いて下さる「よき師（諸仏）」のことです。
歌の大意は、「我が子こそ、その「いのち」をかけて私に無常のことわりを教えに来てくださった仏さまでした」と、いうことです。

限りある身であることを知らされる時、今日一日を、今ひと時を精一杯に生きることが出来ます。
代わってあげることも代わってもらうことも出来ない人生だと知らされる時、初めて自分の人生を背負っていける力が与えられます。
別れねばならぬ人の世であることを知らされる時、また再び会える世界を作ってあげようという仏さまの大悲の心が素直にいただけるのです。
そんな「大切なもの」を、我が子が身を以って教えて下さったのです。

我が子に出遭わなければ、どんな人生を送っていたことだろうと思う時、「我が子こそまさに善知識でした」と仰ぐことが出来たのです。

かけがえのないものを失うということは人生最大の悲しみです。しかし、そのことによって何よりも深く人生を見る目を開けて頂いたと、亡くなった我が子の後姿を拝むことが出来れば、これほど尊いことはありません。

遺骨を手放さない若いお母さんには大変な試練でしょうが、もし、このことに目覚めることが出来れば、その時初めて心の底から「〇〇ちゃん、有り難う。またお浄土で会える日まで、あなたに教えられたようにお母さんは悔いのない人生を送っていきます」と、感謝を込めて、我が子の遺骨を手放すことが出来るでしょう。

重ねて申します。
この悲しみを決して無駄にしないで下さい。
この悲しみを通して本当に「大切なもの」に出遭って下さい。
それが阿弥陀さまの願いであり、子供さんの願いでもあるのです。

平成１５年１２月　「光明寺だより３０号」より